

美術紀行「黎明：ブラックアフリカの夜明け ナイジェリア紀行」 セブンシーズ 1989年9月号

ツインズ・セブンを訪ねて

ラゴス・風景・女たち

そろそろ夜が明けるのだろうか。厚手のカーテンの隙間から黎明の光が洩れている。寝つく前にクーラーのスイッチを切っておいてよかったと思いながら、毛布をひっぱりあげる。

ここはアフリカ大陸の西方、ナイジェリアのオショボの町。アフリカというと猛烈な暑さを想像してしまうけれど、暑いのは海岸地域及び砂漠に接する地域だけで、内陸の高地に向かうとけっこう涼しくなってくる。

殺虫剤の匂いが充満したホテルの一室。疲れた体を持って余しながらうとうとしていると、どこからか歌が聞こえてくる。辺りの静寂を破り耳に届くのはゴスペルソングだ。

歌は旅人の体の奥深く浸透をはじめ、固くなった組織と緊張で張りつめていた心を少しずつ弛緩させる。脳細胞がようやく自由に活動をはじめたらしく、様々な記憶や思いが交錯する。

人口250万人以上といわれる大都会ラゴスは木も動物も見当たらない、人、人、人のごったがえしの町だ。

日本では室町、安土、桃山、江戸時代にまたがる1518年から1865年までの約350年間、奴隷貿易によって1500万人以上のアフリカ人が強制的にアフリカ大陸から連れ出された。その他にも病死した人を加えると日本人の人口の約半分の人々が、この非人間的な取引の犠牲になったという。

また16世紀から20世紀までヨーロッパの植民地政策によって、苛酷な生活を強いられてきた人々は数限りなく、その後独立を果たしたといってもクーデターや内戦が頻発し、近代国家への発展が遅れているのが現在のアフリカの状況だ。

私たちに注がれる視線は鋭く厳しいもので、一つの均衡が崩れると危険な何かがすぐに勃発してしまうという不安な緊張感が漲っていた。搾取され続けてきた貧しい人々のむなしさがそこそこに漂い、無気力で心荒む彼らを見るたび、私の胸はしめつけられた。

しかしラゴスを離れると、台地に働く人々が目に入り、そのまなざしは優しくなる。とりわけ女たちが異彩を放ち、大気の中にその光を充満させている。

女たちが赤ん坊を腰にくくりつけ、その立派なお尻の高みにのせながら仕事をしている姿は美しい。黒褐色の肌に原色の布を巻きつけ、埃や煙や霏の中から浮かび上がってくる

姿は、くっきりと目に焼きついて、溜息が洩れる。おおらかに裳裾を翻しながら地面に足をしっかりつけている姿は、大地そのままのような安心感を覚える。真っ白な歯、官能的でさえある唇、大きく開かれた目……。女たちには美しさと強さが同居している。

近年、石油の輸出で潤った資金によって完備された道路を車が疾走する。急激な車の増加にもかかわらず、交通マナーが悪くて、乗り心地はよくないけれど、通り過ぎる風景は大雑把でのどかだ。

道路は簡便な取引場と化し、いたるところで、バナナ、ヤムイモ、森で獲れた「ブッシュミート」と呼ばれるアルマジロのような小動物を売っている。レストランには、「ブッシュミート料理」もメニューに載っているから広く食されているらしい。

時折、焼き畑の最中に出くわす。火柱が木々を覆いながら空を指し、閉め切った社内にもまで一瞬燃えるような暑さが襲いかかってくる。まるでサーカスの火の輪くぐりのライオンの心境だ。灰だらけのこの土地にやがてヤムイモやキャッサバが植えられ、人々の主食となる。

ヤムイモをホテルで調理してもらったが、ちょうどサトイモとジャガイモをミックスしたような味で、極辛の現地料理をつけて食べると美味しい。

道端には大地の豊穡を意味するという蟻塚が2メートル以上の小山となってくつも見え、私の蟻塚のイメージを完全に打ち消す。その向こうは木々草々の密生する森。ヤシの木がニョッキニョッキと聳え、その深い森へと続いている。

キラキラ輝く子供たち

昨日、オショボへくる途中車を止め写真を撮る夫を待っていると「オリボー」「オリボー」と口々に言いながら子供たちが走り寄ってきた。青色の制服を着、英語のワークブックを持っているのを見ると、多分学校が終わったばかりなのだろう。好奇心の固まりのような子供たちは、拙い英語を使い何とか私たちとコミュニケーションをしようとやっきになる。

村を流れる川ではカヌーに似た舟を上手に操る子供やそのまわりで泳ぎに興ずる子供も見える。傍らの茂みでは体長80cm位のとかげが這い回り、やがて暗がりに姿を隠す。家々から女たちが大勢出てきて、夫の側で賑やかな歓声を上げているのが遠めに見える。

「オリボー」とは外国人ということらしい。この小さな村に外国人は滅多に来ないだろうし、私たちも2度と訪れることはないだろう。旅の思い出に「歌って!」と頼むと、恥じらいながらも一番からだの大きい女の子が私の願いを聞き入れてくれた。するとじきに他の子供たちも一斉に歌い出した。

歌はナイジェリアではなくヨーロッパの歌だったから、おそらく学校で教えてもらったに違いない。言葉は理解できなくとも音楽は共感できる。歌声は車が通過するたびにかき消されながらも、遙かとおくまで響きわたり、彼らの無垢な心情は私を強く揺り動かす。

無垢なものの中には我が儘を押し通す権力者、人を陥れる企み、思惑、自己を正当化す

る論理、偽りの知性などはすべて平伏して断罪を受けなければならないだろうと思う。

子供たちがキラキラ輝いて見える。その顔が背景と判別できないほど、滲んでしまった時、私は彼らの幸せな未来を希いつつ抜けるような青空へと目を移した。

森と超人ツインズ・セブン・セブン

森には精霊（神）が棲んでいるという。オショボの森は日本の神社によく似ている。玉砂利を踏みしめながら拝殿に向かうように、私たちは木の葉のそよ音と鳥のさえずりが聞こえるだけの、落葉の道を静かに歩く。森全体が聖域だから、枝を折ることも魚を獲ることも禁じられている。

いくつもの彫刻が暗い木々の蔭から草むらの奥からじっとこちらを見ている。それらは雷の神、川の神、創造の神、力の神などを表現し、オショボの人々の熱い信仰の中心となっている。

総じて宗教は威嚇的で恐ろしい雰囲気をもたらし、もう片方ではその恐怖から人々を救い上げる。古い民族の神話から生まれたこの神々もまた、その恐ろしさを物語りながら人々の大きな支えとなって、感情は生活の大部分を支配しているようだ。

音楽はアフリカの人々にとっては、宗教と同じように強く結びついているものである。音楽は宗教的な意味を持つ葬式や王（神）の儀礼からはじまったといわれ、今でも深い関係にある。

私たちはベニンシティで王（神）の在位10年を祝う祭りを偶然間にした。原始音楽から世界の音楽に共通するのは太鼓であり、鼓であり、ありとあらゆる打楽器であるが、ベニンシティでも打楽器の音が渦巻く中、王（神）への神秘的な幻影と希望とを求めて、踊り狂う人々の群れが、そのリズムに酔いしれ、無我の境地に浸っているのを見た。

彼らにとっては音楽＝リズムで、メロディよりリズムが優先しトーキングドラムのリズムは音の高低により言語ともなる。リズムは母の胎内にいたときやそれ以前から親しみ、しみこんでいるもので、呼吸や心臓の律動のように、肉体の一部として存在している。生命は創造を産む。「すべての芸術は音楽に憧れる」という。人類の起源がアフリカであるとすれば、私たちの想像的な力の原点は打楽器から生まれるリズムということになる。

リズムは宇宙のすべての場所で共有され、底に流れる声明の躍動そのものであり、思考を誘いながら私たちを芸術へと昇華させていく。

ナイジェリアの代表的なアーティスト、ツインズ・セブン・セブン（45歳）も神話信仰の中で生まれ育った。彼の人格、精神形成は、ナイジェリア西部地方に住むヨルバ続の伝統文化に拠るところが大きい。

彼はヨルバ族が建てたイバダン王国の王子として、1944年に生まれた。彼の母は7組の二子を含め18人の子宝に恵まれたという。ヨルバ続の神話では、至高神である雷神

シャンゴが創造した人類の始祖は、男女一对の魂を持つ両性具有の存在だったといわれる。このことから二子は神性の顕現であると尊ばれ、人々に富と幸運をもたらすと信じられている。「エネルギーとハートの源は天（神）が与えてくれた」と言うツインズ・セブン・セブンは、特に雷神シャンゴのように激情を迸らせ、正義心は燃え、創造的な活動をし、妻と子供は何人いるかわからないというほど精力的な毎日を送りながら、誇りと自信に溢れているようだ。彼の言動は常に周囲の憧憬・羨望・注目を集め、「セブンが来るとみんなが集まってくる」と人々は楽しみに、彼の魅力の一つを語る。

想像力は時として神の言葉を生む。

訪問した彼の家には、塀や外壁、彼の率いる楽団のための舞台などにヨルバの信仰の神々が、彼の手によって創られ祀られている。ハイビスカスやジョーゼットの木の花が咲く下をにわとりやヤギが徘徊し、洗濯の水の音、子供たちの泣き声に混じり、女の人の透き通るような歌声などが聞こえて、人間らしい暮らしが繰り広げられている。

彼は持てる力を多方面に具現化しているが、音楽を源とする美術の分野にその非凡な才能を強く示している。

18歳から描きはじめたという彼の絵は、主に切り取ったり貼り合わせたりした何層もの合板や木綿布をキャンバスとし、オイルパステルや油絵の具、インクなどで緻密に描写されている。

アフリカの仮面によく見られるような特長のある目がこちらの心を凝視し、爬虫類の生き物が画面中にごめいて冷やかな視線を投げてよこす。森羅万象・精霊信仰の世界が展開され、科学では解明できない畏怖の念を呼び起こす。うっとうしい人間界に警告を発する動物たちと永遠の親近感……。見るものにはそれらが画面から抜け出して、飛びついてくるように感じられる。

「想像力を試してみたい」という彼の絵への挑戦は、絵と向き合うものたちを別世界への美へと誘い込むことに見事に成功しており、個々人が意識をしていない自分自身の内奥の、神秘的な未開拓の部分、暴き出されてしまうような怖れに似た感動を起こさせる。

ツインズ・セブン・セブンは人間に通信する役目を背負った、神の代理人ではないだろうか。超人的な彼の仕事振りに思いを馳せた時、ふとそう思い当たり、私はすっかり夢から醒めてしまった。

トンカラトンカラ……。ヤムイモをつぶすリズムカルな音が厨房の方から聞こえてくる。そろそろ起きなければならない。新しい朝が今、またはじまったのだから……。